ポケモンと魔法と

しーそるとみるくあっぷるてぃー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンと魔法と

【Ｎコード】

Ｎ２９４２Ｓ

【作者名】

しーそるとみるくあっぷるてぃー

【あらすじ】

ポケモン神様魔法えくすとらえくすとら、ごちゃごちゃした世界をのんびり旅するお話です

プロローグ（前書き）

更新不定期

プロローグ

……なんでここに他人がいるんだ？
いや、俺以外の人間って言う意味で
へー…死んだのか？
よっぽど誰か恨んでたのか、じゃ無きゃここにはこれないはずだし？
あぁ、犯人見たのか。そりゃ恨む…え？違う？

……分かった、分かったから、少し落ち着け

出たい？生きたい？久しぶりに前向きなこと聞いたわぁ…
お前の世界じゃ無理だけどな、俺の元いた世界なら転生できるぞ？
ジンガイって言う制限つきだけどな
迷いないなぁ……本当にいいのか？本当だな？

見た目は元のままとして…イケメン？いや、メンドクサイ
能力とか別に要らないよな
要る？まぁ、その辺はお前しだいだよ
器の性能は良いから、それだけは保障する
あぁ。後、頑丈かも。元鉄だし……いや、こっちの話
眷属は…別の魂だし、器だけだし、多少惹かれるかもしれないが問題ないだろ　多分な
これで準備よしと

…お礼なんか要らないって
俺は早く静かに寝てたいだけだしなぁ？
俺の名前？
正直、俺のことなんて一瞬で忘れてほしいんだが
……それは怖いなぁ、分かったよ

十六夜（イザヨイ）

それが俺の名前

さて、それじゃキリも良いし

そろそろお目覚めと行こうか

プロローグ（後書き）

誤字脱字ございましたら、ご報告していただければ幸いです

1．まずはお目覚めで

暗い　狭い　でも、暖かい
浅い眠りを行ったり来たり
しばらくすると、こつこつと外が叩かれた
身じろぎをして、ぼんやりと音のしたほうを見る
もう一度、音がする
今度はパキリと割れる音とともに、外の光が差し込んだ
暗い場所に目が馴れた俺には、少しばかり眩しい
外に、出ないと
重い手を動かして割れたところを押す
すると、ぱきぱきと細かい音を立てて簡単に俺の手は外に出た
結構力を込めていたせいか、体制が崩れてそのまま転がり落ちるように俺の体が外へ出る
地面に落ちそうになった俺の体を、ふんわりと誰かが受け止めてくれた
慎重に地面に下ろされ、明るさに慣れた目をこすり
お礼を言おうと、自分を見下ろす影に目を凝らす
そこには草の服を見事に着こなした

ハハコモリが居た

「えっと…あっと……ありがと？」
完全に麻痺した思考で
どうにか搾り出すようにそう言うと
ハハコモリは、胸に手を当て優雅に一礼して見せた

あれ、お前、その礼の仕方ってことは、オス？

俺が混乱して頭を抱えている間に、ハハコモリが木の実を集めてくれたらしい
群生してたのかモモンが多い、ありがたく頂くことにする
俺が恐る恐る食べ始めると、ハハコモリは満足げに頷いてからもう一度森に消えた
今は、俺一人だ
山済みのモモンを口の周りをべたべたにしながら、必死に食べる
地味に食べずらい、見た目が桃なので皮を剥いて食べてるけど…
皮ごと食べれたらどうしようか

満腹になり、口の周りを手で拭いながら、あたりを見渡す
ここは森の中にある広場らしい、何でかしら無いけど中心に一本木が生えてて
その周りを森で囲まれるという、ドーナッツ型と言えなくも無い気がする
その中心の木に、なにやらどす黒い色の卵の殻が寄生するように居たなにやらクモの巣かなんかで無理やり接着してある

状況から考えて、俺はあそこから出てきたんだろなー
「あはははは」
思わず空笑いがこぼれる
人外
たしかに人の姿をしているだけの何かなんだろうな、俺は
その証拠をここまではっきり見せられると、なんか受け止めるしかない。よ、な？

そうそう
重要な件を忘れていた
いや、現実逃避してたとも言うけど

ハハコモリに降ろしてもらった時、変だと思ったんだ
自分の手の大きさとか、立った時の景色の違い
声変わりしていない自分の声、部活で手にできた肉刺が無い
なんかから察するに

俺はどうやら小学校高学年程度の身長らしい
いや、もっと率直に言うなら
俺はどうやら小学校高学年程度の年齢らしい

……見える範囲で確認したとこ、肌の色と髪の色が変わってないのが救いか
多分、目も変わってないんだろうな
見た目は、確かに変わってないらしい

見た目は

「いや、台無しにされた青春をもう一度送れるんだっ！」
そう考えればいける、むしろこの状況大歓迎？！

1．まずはお目覚めで（後書き）

誤字脱字ございましたら、ご報告していただければ幸いです

2．主従と否定と

ハハコモリが帰ってきた
服を作ってきてくれたらしい
葉っぱでできた浴衣……どれだけ器用なんだこいつ
お礼を言ってから身に着けると、ぴったり
寸法とかしなくても作れるのか、これ
しかも、所々スバメのシルエットが刺繍してあるし

「すごいな、お前」
帯はないけどツタとこれまた草製のボタンで、留められるようになってるし
何でか知らないけど、やたら丈夫で引っ張ったぐらいじゃ破けないし
素直に褒めたら、赤くなってわたわたされた

さて、服も着たし腹も満たしたし
浴衣なのでこちらも正座して
待望の質問攻めタイムです

「お前、やっぱりハハコモリなんだよな？」
ハハコモリは少し首を傾げてから、頷く

で・す・よ・ね……ポケモンかぁ

ゲームやってたけど、まさかリアルに見ることになるとは思ってなかった
まぁ、いきなり魔物がいるところに放りだされるよりかマシか
前置きがアレだったせいか、そこまで拒絶感も無いし
その辺は感謝するべきなのか？

まぁ、いいや

「ほかの種族もいるんだよな？スバメとか刺繍してるぐらいだし」
今度は、たいした間もおかないで頷いた
「人も住んでるのか？」
肯定
「えーと、ここはイッシュ地方でいいのか？」
首をかしげたまま動かない、わかんないってことかな？
ハハコモリが居るんだし、イッシュかと思ったんだけどな…

「お前…野生？」
トレーナーが居るならそいつが現れてもいい気がするんだけど
ハハコモリは、首を横に振る
「えっ、トレーナー居るのか？どこに居るんだそいつ」
予想外の言葉に思わずあたりを見渡す
ハハコモリを腕を上げて
はっきりと俺を指差す

「つ…か、まえた覚えないんですがっ！」
何この、は？
きょとんとするなよ
何かいけないの？見たいな目でこっちを見るなよ
いい子だと思ってたのに、まさかの押しかけ女房いや旦那？
いや、俺男だからそんなのいらんってか、そっちの趣味は無いというかっ！

「いやいや、まさかモンスターボールの概念無いとかそういう落ち？」
ハハコモリが首を横に振って否定する
あるんじゃないかモンスターボール
居るんじゃないかトレーナー

「……とりあえず、人里のほうに案内してもらっていいデスカ？」
なんかもう疲れた……
足しびれたし
いくらいっても首を横に振るだけだし
頼んだとたん嬉々として立ち上がって、片手を伸ばしてくる
抵抗するのもなんなので、大人しくハハコモリの腕をつかんで立ち上がった
ハハコモリは俺の手を取ったまま森のほうへ向かってく
迷子防止ですよね？
……はぁ、前途多難だ

2．主従と否定と（後書き）

誤字脱字ございましたら、ご報告していただければ幸いです

3．理解できない状況で

森をかき分け歩くこと一時間
いやかき分けてないんだけどね、障害物は全てハハコモリがぶった切って行きました
リーフブレードか、切り裂くなのか見分けつかないし…
こんだけ歩いてても、一回も野生のポケモンと遭遇しなかったな
トレーナー以外とは遭遇しないようにでもなってるのか？

手を掴まれたまま、そんなことをぼんやりと考えていると
急に視界が開けた…森を抜けたらしい
少しばかり遠くに、木製の家が立ち並んでる
屋根も全部木でログハウス的な？外見だけど…こんな町あったっけ？
ゲームじゃ出てこないぐらい、ちっちゃな村なのかもしれないしっ！

ハハコモリは、たまに俺の様子を覗いながら村へと歩いていく
矢倉に居る見張りの人がこっちに気づいたのかな？……すごい勢いで鐘叩きまくってるんだけど
何か叫んでるけど聞こえないし…鐘の音は聞こえるけど
ハハコモリは音に怯える様子も無く、歩調も変わらないし…
別に、平気だよな？

それから、村に入ったのはいいけど、人っ子一人居なくってさ
ハハコモリに引っ張られるまま、村の広場らしき場所に辿り着いてさ
「森主様、突然のご来訪のゆえこのような簡素な姿でのご歓迎お許しください。」
で、茶髪の女の子のご登場で
うん、今の俺よりちっこいよ。なぜか正座でお出迎えなんだけどさっ！
粗末って言うけどちゃんと布製なんだから俺よかマシなんじゃないかなっ！

傍らにキルリアがいるし、かわいいなーキルリア
トランス中みたいだけど、瞑想？なんか青く光ってるよ
なにやってんだろなー、あれ

「本日はどのようなご用件でしょうか？」
もう笑うしかないね
ハハコモリの後ろにいる俺なんか眼中にないし
というか、視線合わせようとしてるのに意図的に無視されてるし
「なぁ、話に全くついてけないんだけど」
とりあえず、さっきからひとりごとの激しい女の子に聞いてみる

うんまぁ、無視される可能性がおっきいけど

「黙っていろっ！私は今……申し訳ございません…はい、畏まりました」

怒ったり怖がったりしぶしぶだったり殺気向けてきたり忙しいなー

自分より年下の女の子に、そんな顔されても普通にかわいいだけなんだけどさ

うん、かわいいよ。生意気だとも思うけど

女の子が傍に居るキルリアに、目配せをする

キルリアが青く光ったまま、俺の傍まで重力を感じさせないジャンプを見せて

頭突きされた、痛くないよ。こつんって軽く

あの可愛さなら全力の頭突きでも受け止められる気がした

確実に、幻想だけど

『マスター、私の声が聞こえますか？』

「いや聞こえてるけど何、マスターって何？！」

反射的につこんだよ

なんだか1日目にして変なスキルがあがった気がするわ…

どうせならフラグメーカーとか、王道展開のほうが嬉しいんだけどなぁ、俺は

『あぁ、マスターにようやく私の声が届いた……木々の神オーリス様に感謝を』

そして無視されたよ…恍惚とした声が聞こえてくるけど、誰だよいや、わかってるよ

この場で、俺のことを主人（マスター）呼ばわりしてくる奴が一人というか一匹しかいないのは

「どこの馬の骨とも知れない奴に…」
歯ぎしりが聞こえてきそうな形相で睨まれる、俺
俺はなんも悪くないっ！
無罪を主張します！

『マスター、あなたには説明しなくてはいけない事が沢山あります』
「説明しなきゃいけないこと？」
『正確には説明して理解し、記憶してもらう事が山の様にあります』
「勉強の気配がする…」
まさかのカンヅメルート？！

『イース、貴女にも手伝ってもらいます』
「……森主様のご要望でしたら喜んで」
すっごい不服そうに女の子がキルリアを抱きかかえて立ち上がる

『さて、マスター？私としてもマスターにこのような苦行を強いたくはないのですが
これから生きていくためにも、基礎知識というのはとても重要なものになりますので』
「えーーーと、ほらそれは要所要所で覚えていけば…さ？」
『まずは、マスターのこの世界での立ち居地を知ってもらう所から始めましょうか
そうすれば、そんな寝言を言っている暇はなくなるはずですから』
こわいよこの子っ！
女の子…イースのほうからは殺気バシバシ飛んでくるし
代わりたいのか？なら喜んで代わるよっ！

「それでは、滞在場所にご案内いたします」
イースが歩き始めて、俺がその後に続き、見張るようにハハコモリが最後尾についた

……逃げ出したかったのにっ！

3．理解できない状況で（後書き）

脱字、誤字などございましたらご連絡いただければ幸いです

4．お勉強のお時間です

ログハウスの一つに連行され、入ってすぐの場所にある椅子に座らされた
テーブルにはキルリアがちょこんと座り、俺の正面にはハハコモリイースは俺から見て右の椅子に座って俺をにらんでいる

『…言わなくてはいけない事は山のようにあるのですが……
マスター、とりあえず何か質問はありますか？』
「えー…突然言われても。疑問、疑問……なにかあったような？あーそうだ、ここなんて言う地方なんだ？
カントー？ジョウト、シンオウ…大穴としてオレンジ諸島もか、あれはカントー地方でいいのか？」

「どこですかそれは…少なくともこの近辺の国の名前ではなさそうですが」
「……国？いや、国なんて…映画でぐらいしか出てこなかったよう、な？」
「その国の名前は？」
「いやいや、そこまで覚えてないって俺ゆるいファンだったし。あれだよ、波動の勇者がどうのこうので生命の木がどうのこうの…」
「使えない記憶力ですね。波動の勇者……やはり聞き覚えがないですね」
『マスター、ここは貴方の世界でのポケットモンスターという世界とは著しく食い違っていますので
だいぶかけ離れた、ポケモンの並行世界とでも思ってください』
そう、ハハコモリが俺とイースのやり取りに口をはさむ
…貴方の世界？

「あれ？俺、お前に異世界出身って言ったっけ」
『いいえ、言われていませんが』
「じゃぁ、なんで知ってんだ？」
『私が貴方の世界を知っているからですよ、マスター
正確に言うなら違うかもしれませんが、多少の違いなら同じといってもいいでしょう？』

すでにハハコモリが何を言ってるのか分からない
とりあえず、首を傾げてみた
溜息が、聞こえたような気がした

『その話はややこしくなるので一先ず置いておきましょう
そうですね、マスターが知っているポケモンとこの世界の違いを述べていきましょうか』
「あーうん、まかせる」
正直理解しきれるとは全然思ってないけど

『まず地理ですね、歴史も違いますがポケモンの神話はだいたい共通しています。
もっとも、こちらではポケモン以外の神話も多くありますが』
「以外・・・？」
『えぇ、この世界には神がいます』
「信仰とかの対象って意味だよな？」
『いえ、本当に。仮想のものではなく実際に』

「…冗談だろ？」
『少なくとも彼等(カミ)が我々の人生を簡単に左右存在であることは確かですよ？』
「……まぁ、いいや。どうせ、そんなすごい奴と関わり合いにはなりたくないし。

うん、俺はこう普通の、農業とか、計算できるから商業とか？
そういう普通の平凡な生活したいし。そういう予定だったし俺」

うんまぁ、普通に特技も無いし
あのまま高校生活送ってもさ。
そこそこの大学入って、どっかの会社でサラリーマンだろうし
その辺思いあがるような幻想抱いてないし
せっかく生き返ったけど、もう危険な事とはかかわりあいたくないし
もう、狂気とかそういうのは腹いっぱいなのさ。俺

『無理だと思いますよ？』
ぼんやりとした思考は、ハハコモリの声で遮断される
「え？」

『貴方はその神の一柱ですから
それも、この世界で一柱しかいなかった、生き神の一柱です。貴方を入れたら二柱ですね』
「は？」
『しかも、堕ち神の弟神。
幸いなのは、まだ勘のいい巫女達と神々しか貴方の存在を知らない事でしょうか』
「……えーと？」
『あぁ、堕ち神というのは…そうですね、魔王のようなものでしょうか？
私は本人に会ったことはないですが、噂を聞く限りだとなかなか残酷な性格をしているようで』
「つまり？」
『否応なしに人々から恐れられて攻撃を受けるでしょうね
そうならないためにも、貴方には少々不自由な思いをしていただきますが。

いきなり呼び出されて、魔王討伐のち死刑よりはいいと思いませんか？』
比較対象がおかしいというか
実感がないって、いきなりなんか神だの魔王だの
話が飛んでいるというか、なんというか

『口が半開きですよ、マスター…
まぁ、正体を知られるとまずい程度に考えていただいて今のところ結構です』
そうして、にっこりとハハコモリが笑って
『だいぶ話が戻りますが、この土地の名前でしたね。
村の名前はありません、強いて言うなら「森守りの村」もしくは「オーリスの村」
国の名前は「スタッカート」森と観光と音楽の国です』

イースのほうを見るといつの間にか席に居ない
逃げたなっ！

『さぁ、まだまだ序盤ですよ？
マスター、がんばって覚えてくださいね？』

5．授業終わりと睡眠と

『さて…そろそろ今日は終わりにしましょうか
明日は朝早く此処を立ち去ります、早めに寝てくださいね』

ようやく
ようやく、ハハコモリの授業から解放された時には月が天井過ぎて沈みかけてる時だった
月が沈む時間なんて日によって変わるけどさ、気分的には真夜中だし無理やり情報を流しこまれたせいで、頭が痛い
途中から意識がなくなった気がする……けど、そんな状態で授業しても意味あんのか？

『問題ありませんよ、テレパシーですから
相手が寝ていようが起きていようが一応意識には届いているはずです』
「まさかの睡眠学習……俺、寝ててもよかったんじゃ」
『いえ、理解度に差が出ますから
それに一応主はずっと起きていました…記憶は飛んでいるようですが』
いったい何をしていたんだ…俺
普通に聞いてたんだよな？
きっと

『そこのキルリアにも礼を言っておいてください
シンクロとテレパシーによる翻訳は負荷が少ないとはいえ、長時間に及びましたから』
「へっ？あっ、ありがとな、キルリア」
キルリアにそっと手を伸ばす

別に怖がっていないようなので、そのまま頭をなでると嬉しそうに目を細めた
……かわいいなぁ、キルリア
お持ち帰りしたい、いっそ抱きかかえて寝るかっ！
熟睡できる気がする、そのまま布団から出ないで引きこもりになれる気がするっ！

『……ていくあうと？』
「そうテイクアウトっ！……喋れたのかっ！」
話せるのにずっと黙ってたのか
……無口なのか、ラルトス気分が抜けてないのか？

『しゃべれた……クー』
「……腹減ったのか？」
『マスター……おそらくは名前だと思いますよ？
以前イースがそう呼んでいましたから』

クーか……また、こう、気が抜けるというか
聞き覚えがあるというか

「名前……そういや、ハハコモリ。お前の名前は？」
『ありませんよ。早くつけてください』
「……あれだよな、名前を付けると契約がどうのこうのとかそういうのはないよな？」
『ありませんよ。もう一度最初から授業しましょうか？』
『……ましょうか？』
ハハコモリの真似をして首をかしげるクーが可愛い……っ！
可愛いけどあんまり悶えてるとハハコモリの視線がきつい

「カンベンシテクダサイ、オネガイシマス」

『では、早く名前を決めてください』
「……俺、ネーミングセンス皆無だけど、いいのか？」
『いいですから、早く』

ハハコモリが苛立ち始めたよっ
このまま煙に巻くような話術は無いので、少し頭をひねる

「じゃぁ、セバスで」
『……。』
ハハコモリ、もといセバスが頭を抱えてる
どうやら元ネタはわかるらしい……いや、元ネタっていうか普通に執事＝セバスチャンなんだけどさ
決してあの悪魔じゃない。セバスの脳裏に浮かんだのが何かは追及しないけど

『……わかりました、セバスですね。』
『……せばすです』
「いやいや、クーはクーだろ……」
『……クーはクー？』
よしよし、とクーの頭をなでる
そのまま立ち上がって、椅子をきちんと机の中に入れて

「……俺はどこで寝ればいいんだ？」
『階段登って右手の部屋に。イースが準備は済ませていたはずなので』
途中から姿が見えなかったのはそのためか
悪いなイース、俺はてっきり逃げただけかと思ってたよ

「セバスはまだ寝ないのか？」
『私は…少し用事があるので森に帰ります。

マスターが起きる前には戻ってきますので』
「なんか手伝えることがあるなら手伝うけど？」
なんだかんだで世話にはなってるわけだし…
自分だけ寝るのも、なぁ？

『…その言葉だけで十分です』
そう言ってセバスは一度礼をすると、家から出て行った
うん、まぁ、あいつにも色々あるんだろ

「さて、俺も寝るとしますかね」
階段に向かおうとするも…なぜか右手が空中固定されたらしい
……腕が伸びたよ　ぐきっていった気がする
痛みは予想よりもだいぶ薄いけど……うん

『……ていくあうと』
机の上からそんなテレパシー……この子あれ本気だったの
念力か、この固定は念力なのか
そうだよね、全固定よりこう一部固定だとバランス崩せて自分の重
さでダメージ食らうのか
草結びが余計可哀そうなことになりそうだな、おい

「……」
『……』

「わかったよ、ほら」
残った左手を伸ばすと、軽い音を立ててクーが手のひらに乗った
重さがほとんどないから落っこちないか不安なんだけど、まぁ念力
使えるなら心配ないだろうけどっ！
重さも念力で調節してんのかな…とか思っているうちに右手が動く

ようになっていた
もう行ってもいいらしい

『…ひきこもり』
「……ん、一緒に寝ような」
クーを抱え直しつつ、階段を上っていく

そういや俺、何時引きこもりたいって口に出したっけ？

6．境界線と夢の中

ごぽり

自分の吐きだす空気の音を耳にしながら、ゆっくりと沈んでいく
水よりも少し抵抗のある何かが四肢に纏わりつく感触が少しひんや
りとしていて心地いい
水面は見えず闇と、時折赤い線が視界を横切りまた闇に溶ける

「―ごぽり（ゆめか？）」

口に出した言葉は俺の耳には届かずただ空気の塊になって
沈んでいく俺とは対照的にゆっくりと浮かび上がっていく

これの底にたどり着いたら夢が終わるのか？
まぁ、今生きているのも夢のようなものだけど
俺、死んだし
……死んだ？

あれ、俺

なんで死んだんだっけ

7．夜明けと考察

まぬけな話だけど、目が覚めたことにしばらく気づかなかった
暗いし、重いし、まだ夢の中なのかと
体を起したらクーが転がって…しばらくしてから止まった

どうやら、クーは俺の顔の上で寝てたらしい
……どういう寝像だと人の顔の上で寝れるんだ？

「クー、寝てるのか？」
一応問いかけてはみるけど、返答は無し
寝てるのか…寝てるんだな

起こさないようにそっとベットを抜け出して、クーを正しい位置に寝かせる
…人間用ベットにキルリア一匹というのも変な話だけど
窓の外を見るとまだ暗い…遠くの方がぼんやりと光ってるから夜明けは近そうだ
４時とか５時ぐらいか？

妙な夢を見てたせいか目がさえて寝れそうにない
……俺は確かに死んだ
それは確かに覚えてる
死んだという結果しか覚えてない…のか？

死…な
よっぽどショックで妙な死にかただったのか？
自殺は無いし
病気も無かったし、事故死かな？

…いまいちピンとこない
んー……まぁ、思い出して人格に支障をきたすのもいやだし
この件はしばらく放置でいいか
差し迫った話でもないし

とりあえず、小腹がすいた
冷蔵庫……あんのかな、無けりゃ水でもいいから飲もう
そんなことをのんびり考えながら、部屋の扉を開けて階段を下りていく

8．寝ぼけ眼と間食と

一階に降りてあっちこっちのドアを開けること3回目
ようやく目的の台所らしき場所にたどり着いた
……予想はしてたけど冷蔵庫は無いし、水道も無い

蓋がしてある大きな壺を開けると水がたっぷり入ってた
水って、動いてないと淀むんじゃなかったっけ
一先ず喉は乾いてないので蓋をする

棚をあさると籠に拳大のパンが3個入ってる
…固い、そして黒い。手で2つに割いてみると中も黒い
少し匂いを嗅いでみると、酸味のある唾がわいてくる匂いとほんのりと甘いにおいがする
……少なくとも唾が湧いてくるってことは腐った匂いじゃないだろうと判断

食べると固いけど酸味はさほど気にならないし、中の果物らしきものはほんのりとアクセントになってるし
固いのはよく噛むためか？などと思いつつ、黒パンをかじりつつ家の探索を再開する

探すのは服が入った棚
この葉っぱの服も着心地いいんだけど、浴衣というのが落ち着かないほら、俺一応現代っ子な上に夏祭りも洋服で行ってる人間だし

まずは階段前に戻って、それっぽい物が視界に入った扉を開ける
……此処は倉庫か。服は無い
もしかして寝室にあるのか？と、階段を上がってベッドの部屋へ

クーはまだ大人しく寝てる
視線を巡らせると…やっぱあるじゃんか箪笥
引き出しを開けると男物と女物、両方の服が揃えられてる
女性物の下着から懸命に視線を外しながら、男性の服を揃える

とりあえず、服の形はあまり差が無いので適当にズボンとTシャツをチョイス
服の布が微妙にチクチクするのはこの際仕方ないんだろ…だから、シルクとか高いんだろうし
草の服より着心地悪いってどういうことだ……

着替えて腹の空腹もまぎれたとこで、もう一度ベッドを見る
……クーが気持ちよさそうに寝ている
よし、二度寝しよう
そう決めて、クーの隣に横になる

意外と速く、眠気はやってきて

9．寝起きとシュールと

『…しくしく？』
脳に直接響く音に、目を覚ました

「…クー……か？どうした？」
『しくしく？』
若干重い瞼を開けると、クーが俺の顔を覗き込んでた
二度寝だからか頭は回る、それなりに
別に俺は泣いてないし、クーはいつもの無表情なんだが……しくしく？

「何がしくしくだ？」
言いながら、クーに手を伸ばして抱きかかえる
そうしてから、上半身を起こして……視界に緑が居た

『しくしく』
クーはそう言いつつ、視界の端に移ってる緑の方を指さす
…夜明けとは思えないほど日が高いのも気になるが
緑を見ない訳にもいかないので、そっちを…自分で言うのもなんだけど、固い動きで見た

「……セバス、なにやってんだ」
絞り出すように言えたのは、それだけ

扉を塞ぐ様に体育座りで涙を流してるセバス
そして、ドンドンと叩かれ続ける扉と扉越しにセバスを慰める声
……寝起きに見るもんじゃねぇ
この状態で俺は寝てたのか、すごいな俺

『しくしく』
「クー…見ればわかるから訳さなくていいって」
セバスからの返答は無いし…。
……何があった

『マスター……パー……寝……し』
途切れ途切れにセバスの思考が飛んでくるのが怖い
……この阿鼻叫喚…とまではいかなくても、シュールな光景をどうにかするためにも
とりあえず、クーに話を聞こう

「なぁ、クー何があった？」
『何かあった』
……よし、諦めよう

改めて、セバスを見る
…同化してて分かんなかったけど、どうやら扉を塞いでるのはセバスだけじゃ無い
なんか草で編んだデカイ籠も置いてある
中には、草製の服らしき物が大量に詰め込まれている……

……あれか？
用っていうのはアレを作ることだったのか？

作る→着せようと持ってくる→俺を起こそうと布団をめくる→俺、洋服→へこむ

……冗談のつもりだったんだけどありそうで怖い
いやいや、さすがにそんなことは…

『たてせん？』
……クー、君には漫画的表現でも見えているのかい？
そして、いい加減ベッドから降りよう、俺

「…セバス？大丈夫か？」
クーを抱えたまま、ベットから降りてセバスへ近づく
俺の声に、セバスが勢いよく此方を向いて
啜り泣きが号泣に変わった

…えー

9．寝起きとシュールと（後書き）

…展開が遅いのはご愛敬

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2942s/

ポケモンと魔法と

2011年10月8日23時33分発行